

【基調講演】

「地域でのつながりづくりとは」

講師：ノートルダム清心女子大学

人間生活学部 人間生活学科

准教授 中井 俊雄氏

講師プロフィール

岡山県総社市社会福祉協議会で27年間勤務したのち、令和2年から現職。地域福祉実践の経験を基に、ひきこもり、福祉教育、ボランティア、コミュニティソーシャルワーク、地域共生社会をキーワードに研究。

また総社市総社中央地区地域づくり協議会副会長をはじめ、岡山県や岡山市、広島県尾道市などの各福祉施策の委員・アドバイザーとしても活動しながら、研修や講演会の講師としても活躍。

～メモ～

地区社協役員等実践講座（公開講座）

地域での つながりづくりとは

日時：令和6年8月4日（日）14:05～14:35

会場：広島市総合福祉センター 5階 ホール



清心ちゃん



ノートルダム清心女子大学
人間生活学科 中井 俊雄

自己紹介



所属 ノートルダム清心女子大学 人間生活学部 人間生活学科（社会福祉学研究室）

資格 社会福祉士・精神保健福祉士・公認心理師・介護支援専門員など

活動

- ・厚生労働省 社会福祉推進事業「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士等の活用状況の実態把握と更なる活用等に関する調査研究事業」（日本社会福祉士会）委員会委員（予定）
- ・岡山県福祉サービス第三者評価推進委員会 副委員長
- ・岡山県精神医療審査会予備委員
- ・岡山県地区防災計画等作成推進協議会 アドバイザー
- ・岡山県備北保健所新見支所「思春期の心の健康相談」相談員
- ・岡山県版福祉教育ガイドブック作成検討会 委員長
- ・岡山県ボランティア・NPO活動支援センター 運営委員
- ・岡山県社会福祉士会 災害支援委員会 委員長
- ・岡山市障害者総合支援審査会 委員
- ・岡山市成年後見支援センター 運営委員
- ・倉敷市社会福祉協議会 法人後見運営委員会 委員長
- ・瀬戸内市生活困窮者自立支援ネットワーク会議 アドバイザー
- ・尾道市おのまる会議（重層的支援体制整備事業）委員長
- ・尾道市ひきこもり支援ステーション ネットワーク連絡協議会 会長
- ・総社市ひきこもり支援等検討委員会 委員長
- ・総社市生活困窮支援センター協議会 委員（就労支援部会 部会長）
- ・総社市権利擁護センター運営委員会 委員 ・総社市権利擁護センター支援検討委員会 委員長
- ・総社市総社中央地区地域づくり協議会 副会長
- ・新見公立大学 健康科学部 地域福祉学科 非常勤講師 など



清心ちゃん

前職 総社市社会福祉協議会（27年間勤務）

- ・事務局次長・障害者地域活動支援センター長・障害者基幹相談支援センター長・権利擁護センター長
- ・生活困窮支援センター長・ひきこもり支援センター長 など

シンパシーとエンパシー

シンパシー

Sympathy = the **feeling** of being sorry for someone who is in a bad situation
悪い状況にある人を気の毒に思う**気持ち**

- 同感。共感。(つらかったね。頑張ったね。)
- 相手への同情、相手の感情に同意すること。

エンパシー

Empathy = the **ability** to understand other people's feelings and problems
他人の気持ちや問題を理解する**能力**

(ロングマン現代英英辞典)

- 人の気持ちを思いやる。
- 相手の立場に立って考える。
- 自分と**違う価値観**や理念、考え方を持つ人が、何を考えているのか、どう感じているのかを「想像する力」のこと。

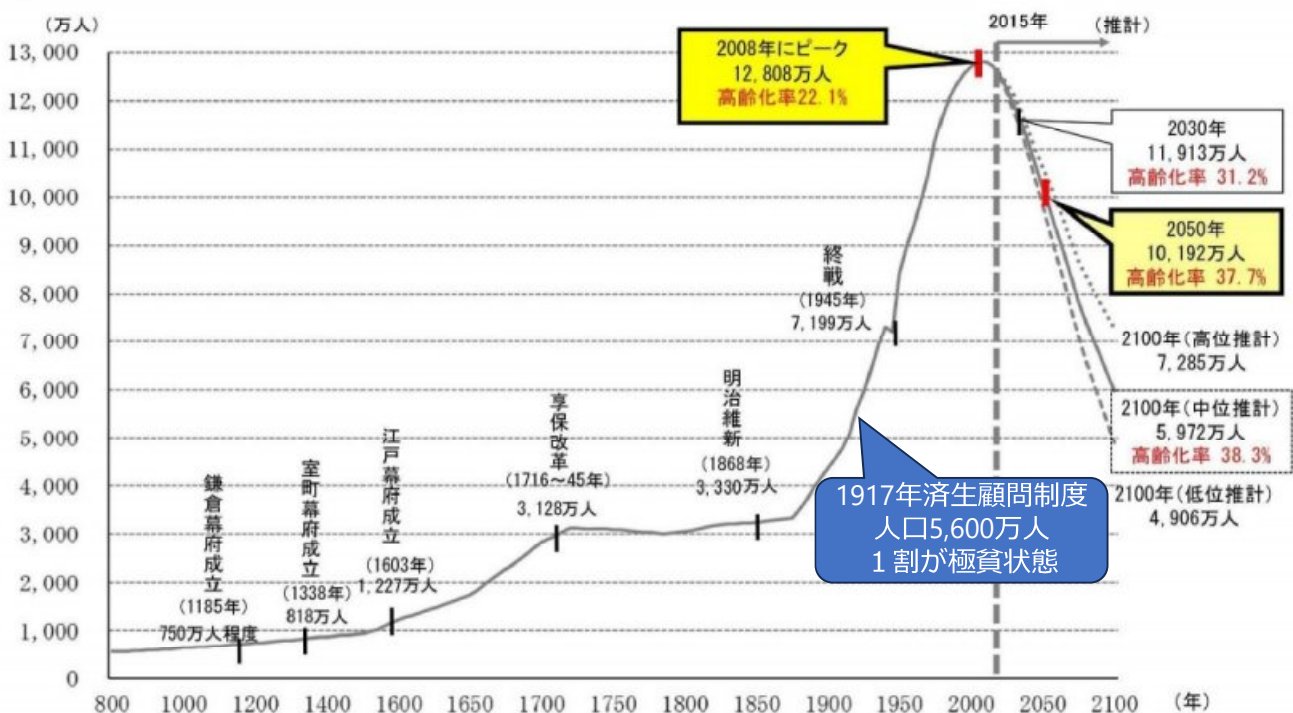
いじめっ子は、なぜいじめているの？
桃太郎の鬼は、どうして退治されないといけなかったの？
シンデレラの継母は、なぜシンデレラにつらくあたったの？
乙姫様は、どうして浦島太郎に玉手箱を渡したの？



3

日本の総人口は2050年には約1億人へ減少

○ 日本の総人口は、2008年をピークに減少傾向にあり、2050年には約1億人にまで減少する見込み。

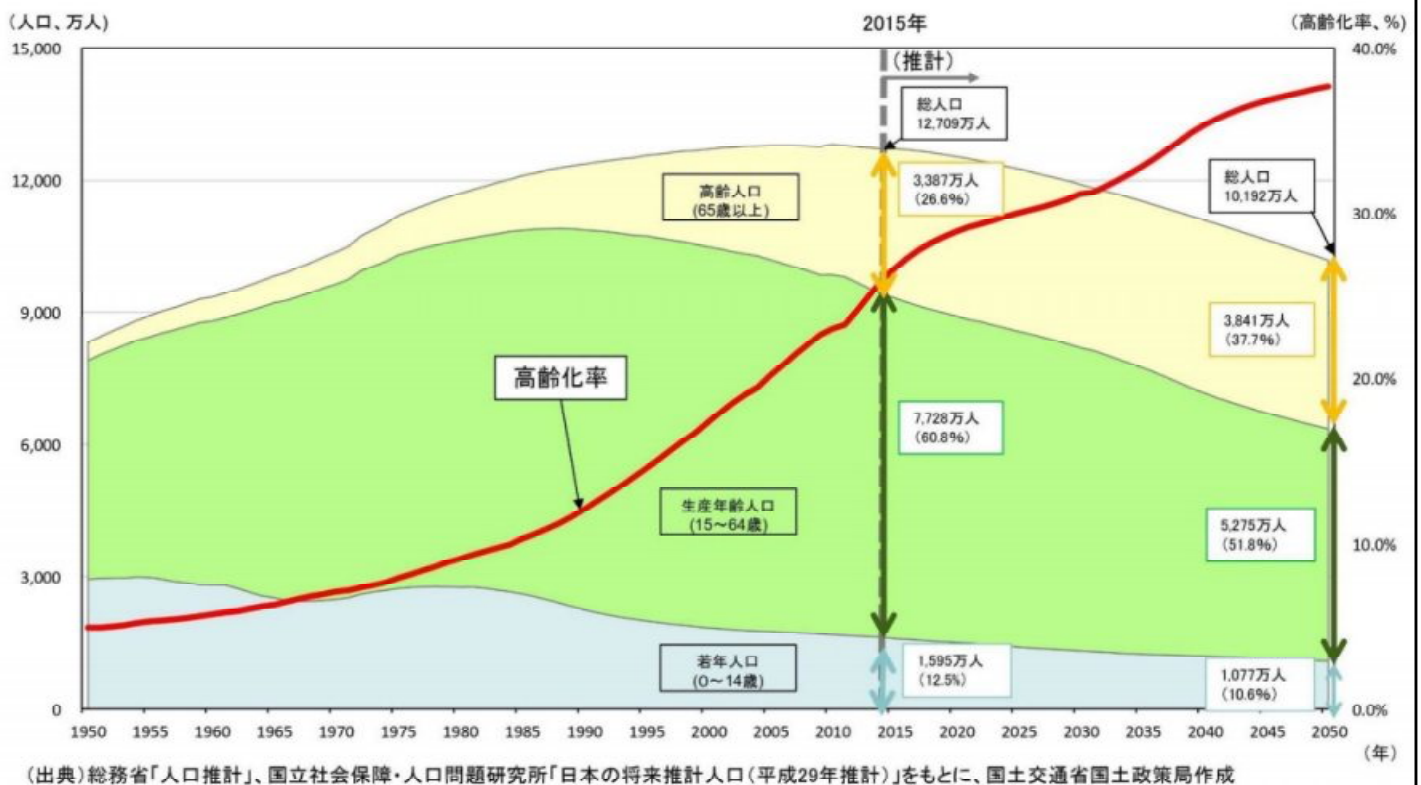


(出典) 1920年までは、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」(1974年)、1920年からは総務省「国勢調査」。なお、総人口のピーク(2008年)に係る確認には、総務省「人口推計年報」及び「平成17年及び22年国勢調査結果による補間補正人口」を用いた。2020年からは 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年推計)」を基に作成。

国土交通省「国土の長期展望」最終とりまとめ

4

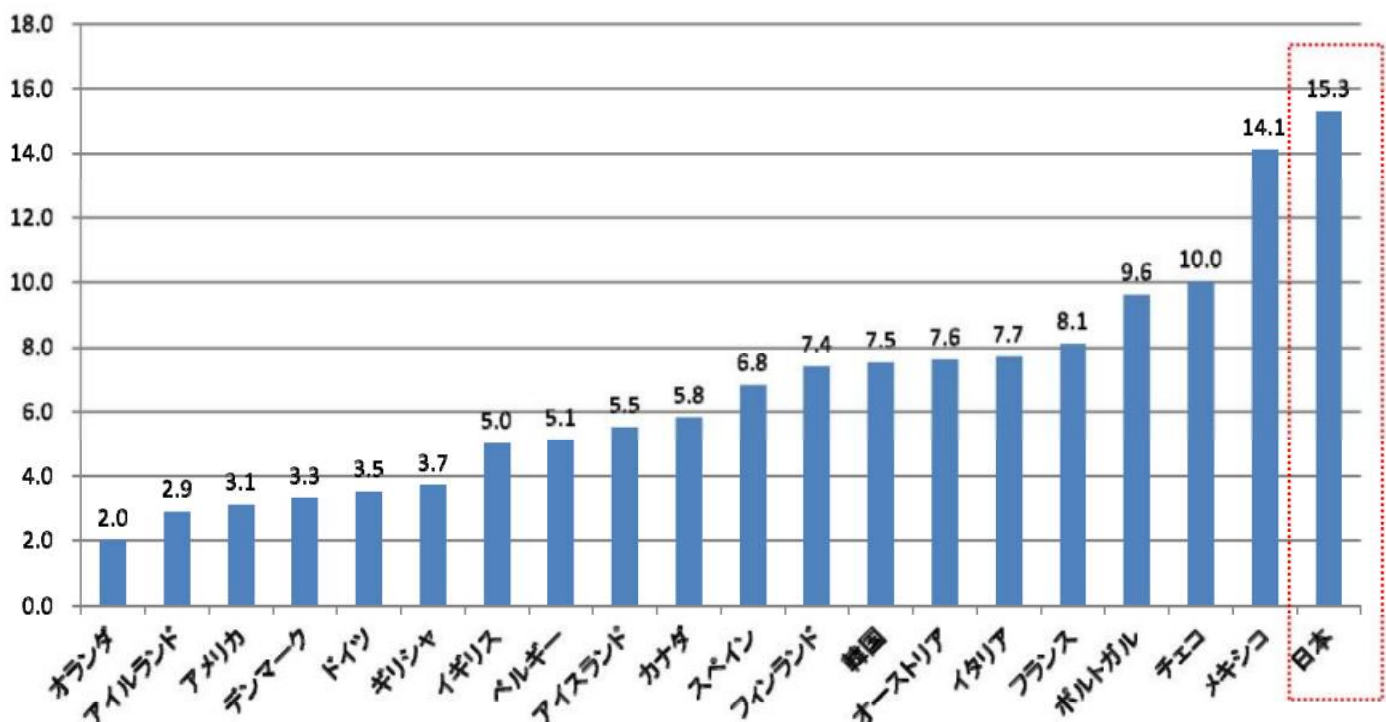
生産年齢人口・若年人口は減少する一方、高齢人口は増加



国土交通省「国土の長期展望」最終とりまとめ

5

「家族以外の人」と交流のない人の割合



(注) 友人、職場の同僚、その他社会団体の人々(協会、スポーツクラブ、カルチャークラブなど)との交流が、「全くない」あるいは「ほとんどない」と回答した人の割合(合計)

(出典) OECD, Society at Glance: 2005 edition, 2005, p8

出典：厚生労働省

6

現在の地域での付き合いの程度

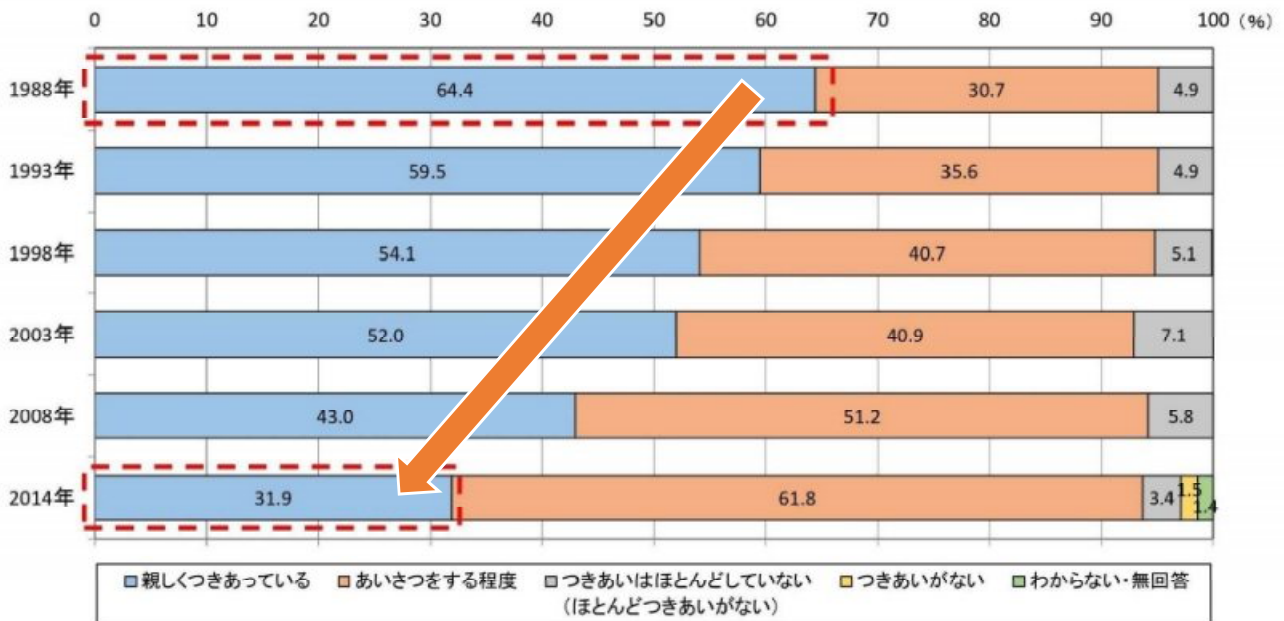


望ましい地域での付き合いの程度



高齢者の近隣とのつながりの状況

○ 60歳以上の男女を対象にした調査では、近所の人たちと「親しくつきあっている」としている者の割合は1988年から2014年で半減しており、高齢世代の地域へのつながりも希薄化する傾向にあると考えられる。



(出典)2008年以前:内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」、2014年:内閣府「高齢者の日常生活に関する意識調査」

注1)対象は60歳以上の男女

注2)それぞれの調査における選択肢は以下のとおり。

高齢者の地域社会への参加に関する意識調査:「親しくつきあっている」、「あいさつをする程度」、「つきあいはほとんどしていない」

高齢者の日常生活に関する意識調査:「親しくつきあっている」、「あいさつをする程度」、「ほとんどつきあいがない」、「つきあいがない」、

「わからない」、「無回答」

孤独・孤立の社会的背景

- 産業構造の変化→**地縁**の脆弱化
- 性別役割分業の変化
 - ① 自営業や農業などの家内労働
 - ② 「家」が確立した中世から、高度経済成長期に「男(夫)は外で仕事、女(妻)は家事・育児・買物(男は妻子を養い、女は家庭を守る)に専念」
(核家族化)
 - ③ 女性の社会進出(賃金労働者化)が進み、共働き家庭が増加
- **物質が豊かな社会になると、集団で協力・共同する必要性が減少**

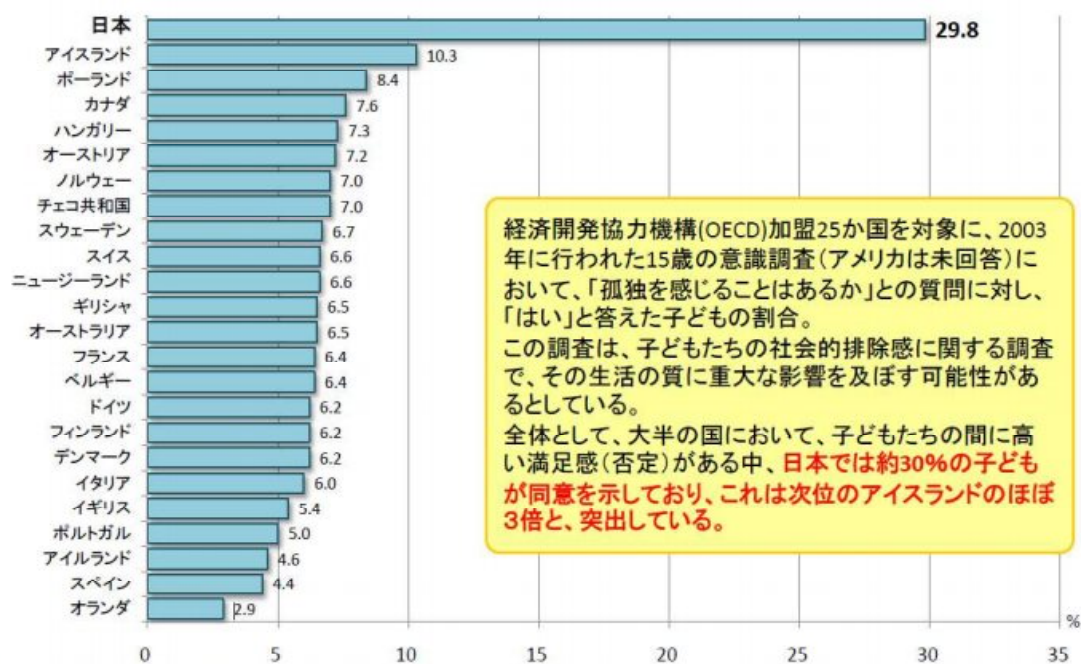
孤独・孤立の社会的背景

- 地域の中での深いつながりを望まない人が増えている
- 目的にあわせて移り住む（地域に根付きにくい）
- 問題が少ない？（家庭内の問題？）
- 個人の問題に地域が踏み込んで良いのか…（支援拒否・寂しさへの介入）
- **自然発生的につながりにくい現代**
- **意図的につながりをつくる必要性**

11

子どもの孤立

「孤独を感じる」と答えた子どもの割合



経済開発協力機構(OECD)加盟25か国を対象に、2003年に行われた15歳の意識調査(アメリカは未回答)において、「孤独を感じることはあるか」との質問に対し、「はい」と答えた子どもの割合。
この調査は、子どもたちの社会的排除感に関する調査で、その生活の質に重大な影響を及ぼす可能性があるとしている。
全体として、大半の国において、子どもたちの間に高い満足感(否定)がある中、**日本では約30%の子どもが同意を示しており、これは次位のアイスランドのほぼ3倍と、突出している。**

UNICEF, Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries, Innocenti Report Card 7, 2007 UNICEF Innocenti Research Centre, Florence.

12

疎外感

図 6.3b は、主観的福祉の心理学的及び社会的側面を探求する試みである。例えば、居心地の悪さ、孤独感、「よそ者のような感じ」などで、これらは社会的排除の認識であり、子どもたちの生活の質に重大な影響を及ぼす可能性がある。この表は、自分自身の状態について3つの説明に賛成か反対かを尋ねた結果を集約している。

- ・ 学校ではよそ者だ (またはのけ者にされている)
- ・ 学校は気おくれがして居心地が悪い

(I feel awkward and out of place)

- ・ 学校はいつも退屈だ (I feel lonely)

全体として、大半の国において顕著な一貫性が見られ、また子どもたちの間に高い生活満足度があることが分かる。ほとんどの国では、上記の説明に賛成する子どもの割合は、最も低い国で 5%、多くても 10% である。比較的高い割合の子どもが「居心地が悪く、疎外感を感じる」という説明に同意したが、この場合でも、「はい」と答える子どもの割合は、24 の OECD 加盟国中わずか 8 か国で 10% を超えたに過ぎない。個別に見ると、**最も目を引くのは日本の結果である。**

この国では **30% の子どもが「孤独を感じる」** という説明に同意している。

これはそれに次ぐ国のほぼ **3 倍** である。質問を別の言語と文化に翻訳することの困難を表しているのか、あるいはさらに調査の必要がある何らかの課題を示しているのか、それともその両方を意味する。

出典：国立教育政策研究所「先進国における子どもの幸せ」2010.3.31



孤立の状況

- ①家族・友人等とのコミュニケーション頻度について、同居していない家族や友人たちと直接会って話すことが全くない人の割合は **10.6%** となっている(図7)。

【図7】同居していない家族や友人たちと直接会って話す頻度



孤立の状況

- ②社会活動への参加について、特に参加はしていない人の割合が53.9%となっている(図8)。
なお、いずれかの活動に参加している人については、「スポーツ・趣味・娯楽・教養・自己啓発などの活動(部活動等含む)」と回答した割合が29.1%と、最も高くなっている。

【図8】社会活動への参加状況



内閣官房孤独・孤立対策担当室「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査(令和4年)調査結果のポイント」

15

長縄跳び競争にチャレンジ

- ・ クラス対抗の長縄跳び競争に出場します。どんな気持ち？



- ・ クラスメイトが引っかかってしまいました。どんな気持ち？

- ・ 車いすの子や運動の苦手な子が一緒に遊びたいようです…。どうしましょうか？



16

地域でのつながりづくりのイメージ

引っかかっちゃった

できないし、やりたくないし！ほっといて！

ゆっくり回してね！
タイミングをみてね！

どうせ何もできないし

入ってもいい？

少し休もう！

失敗しても大丈夫！
ゆっくりでいいよ！

どうしたらみんなで
飛べるかな？

ノートルダム清心女子大学

17

専門職の「つながりづくり」のイメージ

地域づくりに向けた支援

参加支援

引っかかっちゃった

できないし、やりたくないし！ほっといて！

交流・参加・学び
機会を生み出す

コーディネーター機能

入ってもいい？

どうせ何もできないし

長縄跳びをみんなで
やると楽しいよ！

みんなで飛ぼう！

この時間に！
この場所で！

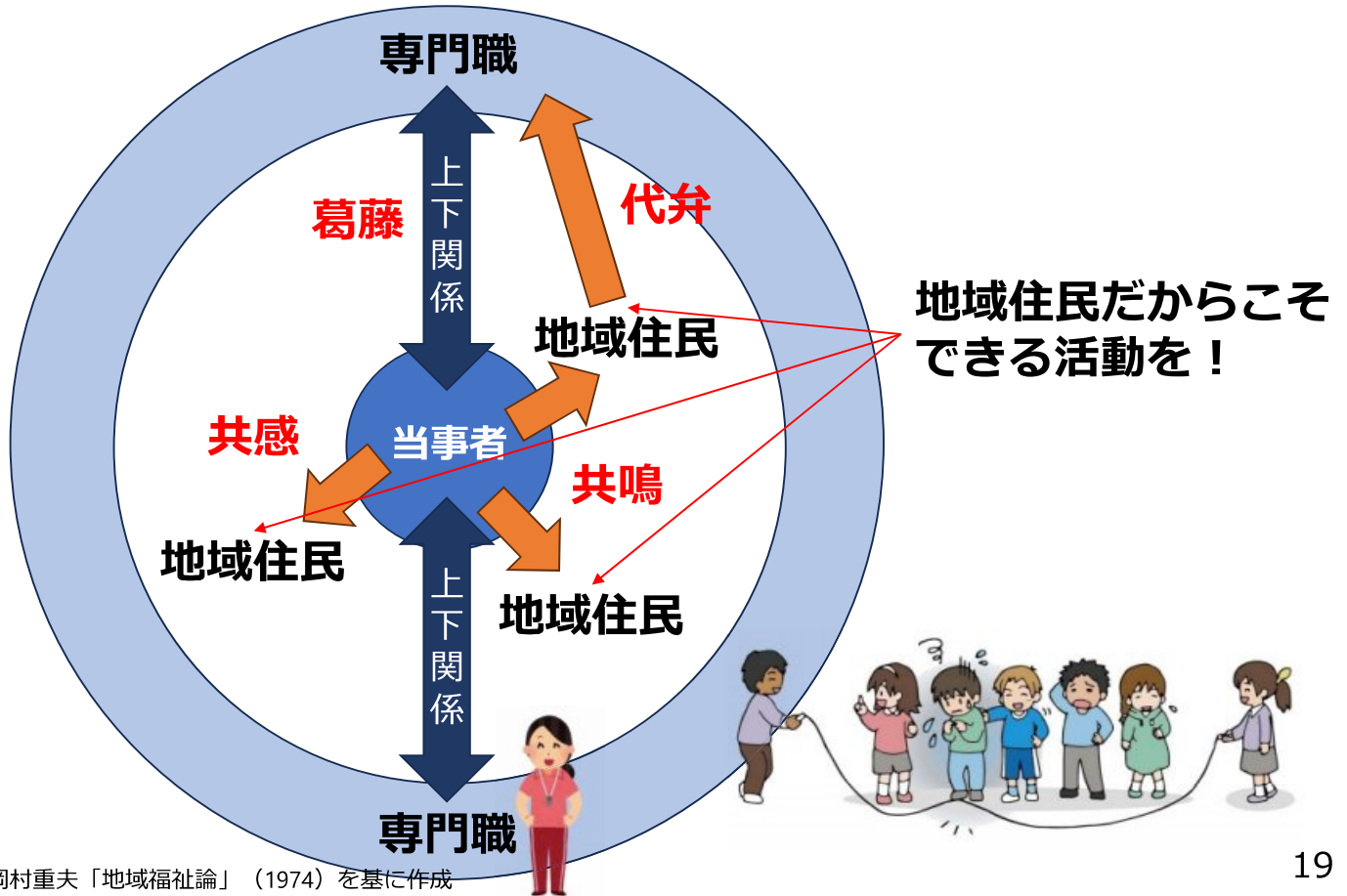
場をつくる

みんなで長縄跳び
やってみない？

CSW

18

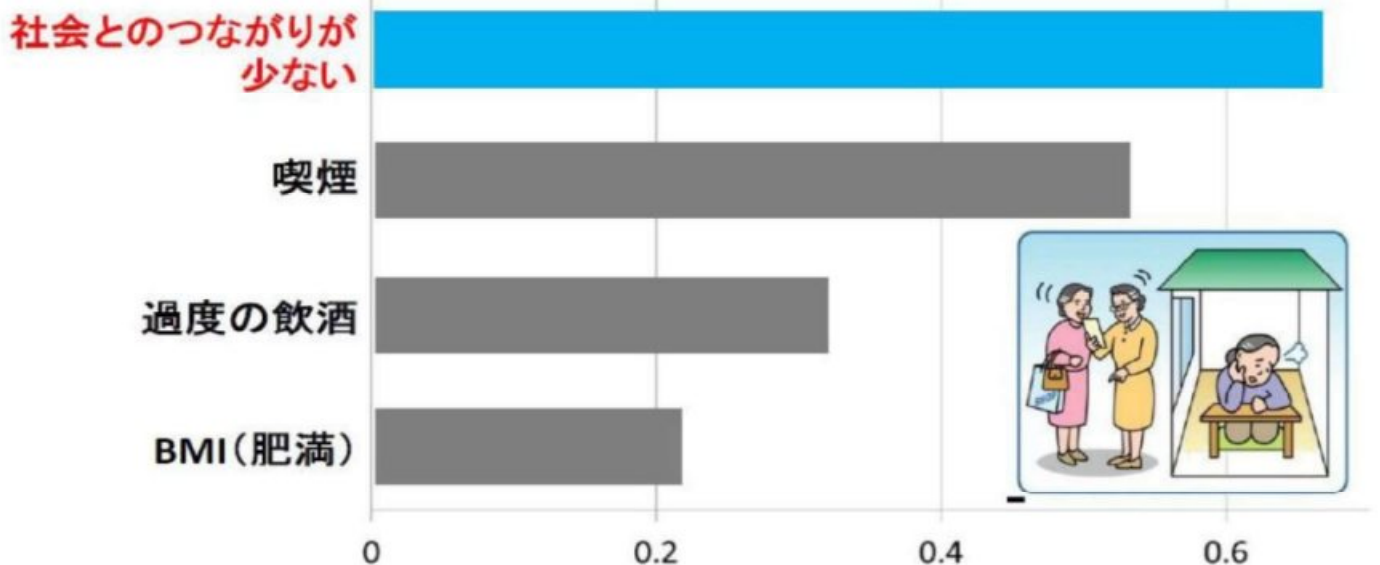
地域住民だからこそできる活動を！



19

生活様式が死亡率に与える影響

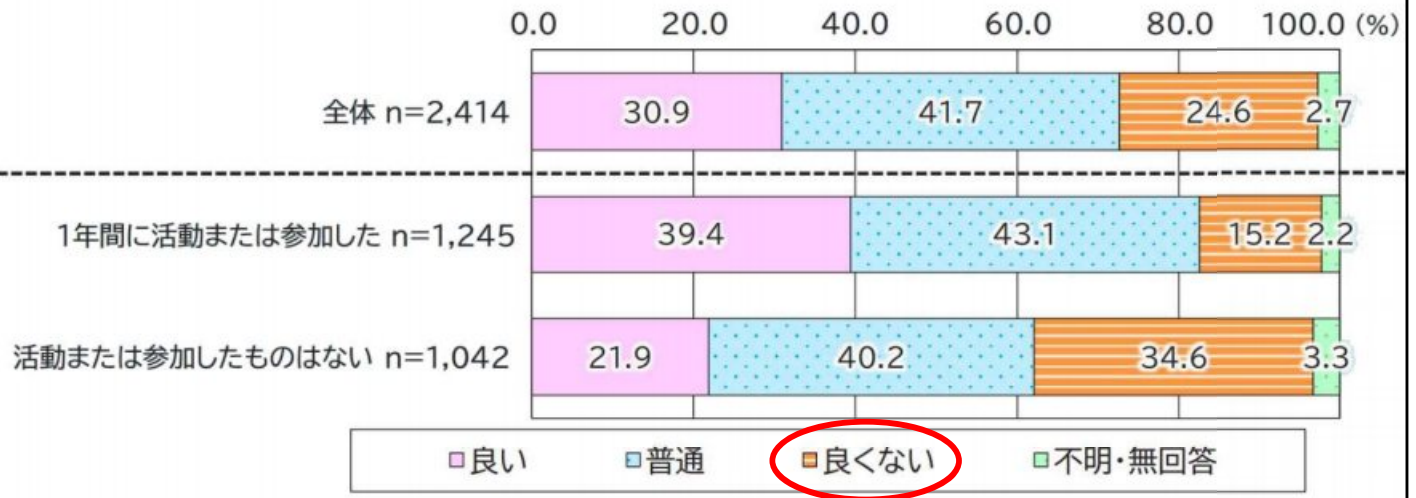
社会とのつながり(近所付き合いや社会参加)を作っておくことが健康に重要



Holt-Lunstad J, Smith TB, Layton JB (2010) Social Relationships and Mortality Risk: A Meta-analytic Review. PLoS Med 7(7): e1000316. doi:10.1371/journal.pmed.1000316

20

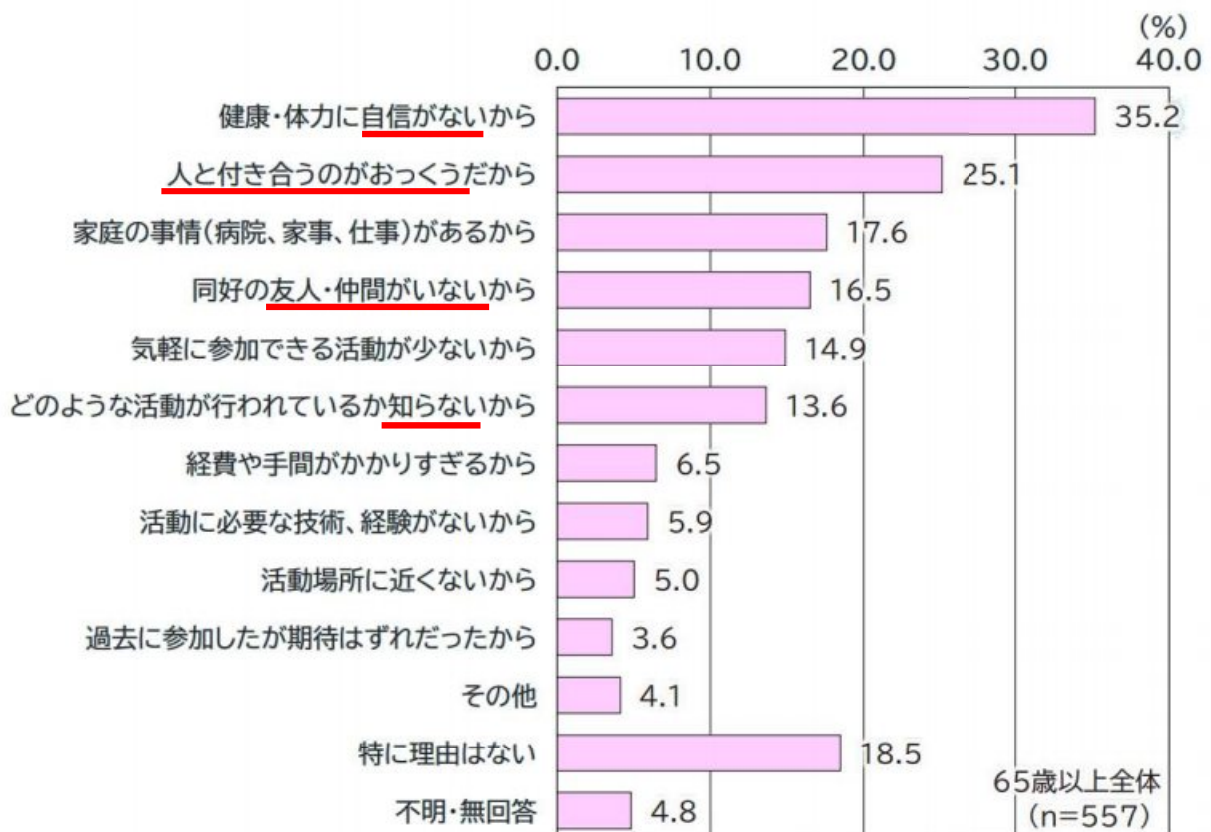
社会活動への参加の有無と健康状態



(注1) 「良い」は「良い」と「まあ良い」の合計、「良くない」は「あまり良くない」と「良くない」の合計。
 (注2) 四捨五入の関係で、足し合わせても100.0%にならない場合がある。

出典：令和5年版高齢社会白書

社会活動に参加したいと思わない理由



出典：令和5年版高齢社会白書
 資料：内閣府「高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」(令和3年度)

本人を取り巻く社会の壁（環境）へ挑戦

① 物理的な壁

- ・ 出かけようにも交通手段がない
- ・ 自由に使えるお金がない

② 制度・サービスの壁

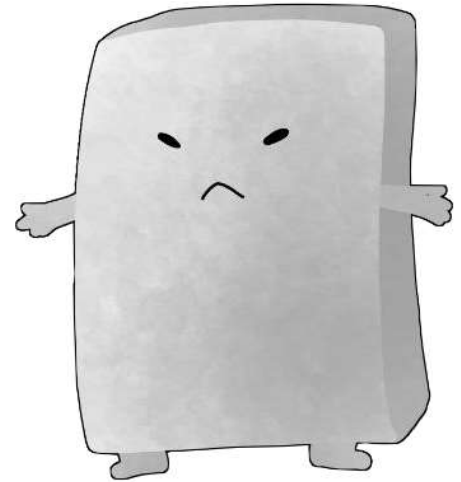
- ・ サービスがない、質が悪い
- ・ 支援に届かない（届けない）

③ 文化・情報の壁

- ・ 世代間で異なる価値観
- ・ 仕事にはコミュニケーション能力が必須

④ 意識（心）の壁

- ・ やり直しがきかないという恐怖
- ・ 恥ずかしい
- ・ 知らない・わからない・無関心



ノートルダム清心女子大学

23

地域共生社会の実現に向けて

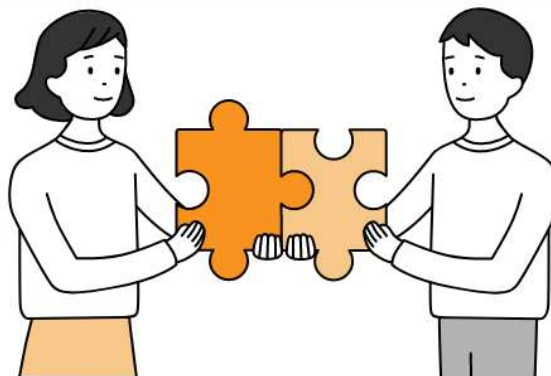
高齢化の中で人口減少が進行している日本では、福祉ニーズも多様化・複雑化しています。

人口減による担い手の不足や、**血縁、地縁、社縁**といったつながりが弱まっている現状を踏まえ、**人と人、人と社会がつながり支え合う**取組が生まれやすいような環境を整える新たなアプローチが求められています。

人と人とのつながりそのものがセーフティネット

地域住民の
気にかける
関係性

つながり・支え合い



専門職による
伴走型の支援

寄り添い型の支援

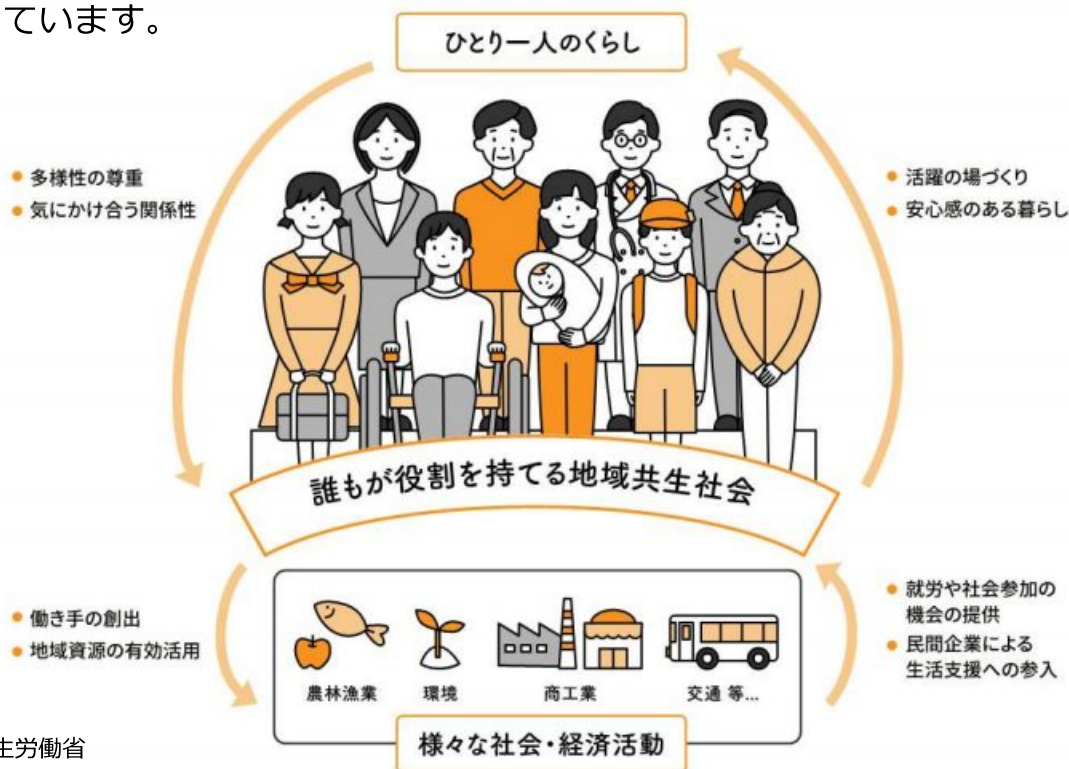


出典：厚生労働省

24

地域共生社会の実現に向けて

制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を指しています。

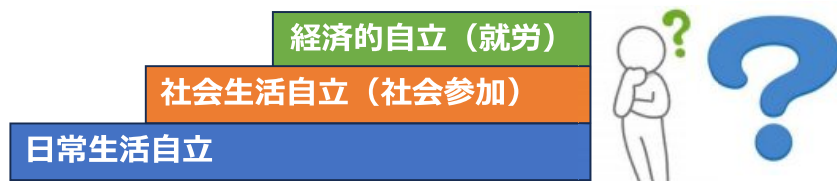


出典：厚生労働省

25

私たちが目指す自立と自律

- あなた自身は、どう**自立**していますか？



- なぜ自立できないのか？その理由を考えると...
 - 誰にも頼らない人、誰にも頼れない人（受援力の低い人！）
- **自立** (independence) (依存：dependence)
 - 他の援助を受けずに自分の力で身を立てること
⇒ 障害があっても能力を活用して社会活動に参加すること
 - **相互依存 (相互実現的自立) (interdependence) : 持ちつ持たれつ**
≠ 共依存：愛情という名の支配 (codependence)
- **自律** (autonomy)
 - 個人が**主体的にみずからの生き方を追求**できること (菊池)
 - 他人支配されることなく、**自分で決定を下す能力、機会**

ケアリングコミュニティ

26

地域生活は専門職だけでは支えられない

現状の課題

友人・隣人との交流



支援や介護が必要になると、友人・隣人との関係は希薄になり、支援を受ける一方向の人間関係に変化

専門職サービス
はあるけど

これまでの地域との
つながりは疎遠に？

出典：厚生労働省

これから

専門職サービス



“お互いさまの助け合い”の輪を広げていくことで、支援や介護が必要になっても、地域社会の中から切り離されず、なじみの関係を継続できる

27

地区社協で展開される地域づくり（イメージ）

地域子育て支援拠点

地域子育て支援拠点にボランティアとして参加するようになった

育児の先輩として子育て世代と交流

地区の住民同士が交流する機会ができた

小学生になった子が気になる・・・

障害を持つ人への支援も手伝ってみよう・・・

小学生の居場所として、子ども食堂を実施

共助の基盤づくり事業

他分野の情報に触れる

出典：厚生労働省（一部改変）

地区社協で展開される地域づくり（イメージ）

「一人暮らしの高齢者や障害を持った人など誰でも気軽に集える場が身近にはない」と気づき「地域の居場所」の創出につながった

拠点で、高齢者や障害分野の情報についても耳にし、イベントなどを手伝える機会があり、様々な人々と触れ合う中で、地域の状況が気になり始めた…

地域における既存の拠点と連携しながら、誰もが参加できる地域の居場所づくりを開始



地区社協

何か、私たちに出来ることはないかしら？

一人の気づきから、それに共感した住民同士のつながりが強化され、住民が主体となった分野横断的な取り組みが創出

出典：厚生労働省（一部改変）

地区社協が担う地域のプラットフォーム（イメージ）

個別支援（相談支援）

- ・ 個別支援から派生する社会資源の創出、仕組みや工夫の考案の促進
- ・ 居場所づくり、生きがいづくり
- ・ 多様な社会参加、社会とのつながりづくり



地域課題の解決を目指した
地域づくり

新たな出会い、気づきから始まる「地域づくり」のプラットフォーム



より豊かな暮らしを目指した
まちづくり



興味、関心から始まる活動

- ・ 多分野・多世代がつながるまちづくり
- ・ 社会参加の場の充実（担い手不足をきつかけとする）
- ・ 共通の興味・関心から生じるつながり
- ・ 住みよい地域をつくる

分野、領域を超えた地域づくりの担い手が出会い、新たなつながりの中から更なる展開を生むための“場”（拠点、機会等）

行政主導の展開ではなく、これまでつながりが薄かった様々な関係者が新たに出会い、気づきや学びを得て、目指す方向性や将来像を共有しながら、地域における多種多様な活動が活性化されていくプロセスが、地域自体の継続性を高めることにもつながっていく

出典：厚生労働省（一部改変）

お客様化社会から市民が主役の社会へ

今の社会の**危機**は、市民の**顧客意識**が強くなり「**お客様化社会**」になってしまっていることです。本来市民は、**お互いに支え合いながら自分たちで社会の課題を解決し、社会をつくっていく**ものです。それが**市民社会**であり、そこを**支えるのが地域福祉活動**なのですが、現在は「地域福祉サービス」という面だけでとらえられ、地域住民はその**サービスの顧客**になってしまいがちです。**地域住民どうして話し合いながら活動して地域をよくしていく**ことは、**仲間**も増え、創造的な活動で**達成感**を得られると、とても**楽しくおもしろい**ことだと私は思うのですが、その点が伝わっていないのです。

早瀬昇「特集 市町村社協を知る－ともに地域を支えるために」月間福祉2023年8月号p.24から

31



fin

